

第25期新宿区社会教育委員の会議 第3回定例会 議事要旨

日 時 令和 8 年 7 月 7 日 (火)
開 会 午前 9 時 3 0 分
閉 会 午前 11 時 3 7 分
場 所
出席者 梶野議長、中村副議長、藤後委員、遠藤委員、原島委員、浅井委員、延本委員、
石橋委員、伊藤委員
事務局 事務局

午前 9 時 3 0 分開会

○議長 これより新宿区社会教育委員の会議、第3回定例会を開会いたします。

まずは、事務局から会議の成立、配布資料の確認をお願いいたします。

○事務局 初めに、本会議の成立についてです。

本日は、委員10名中、オンライン含めまして9名のご出席をいただいておりますので、新宿区社会教育委員会会議規則第4条の規定により会議が成立していることをご報告いたします。

続いて、配布資料についてです。

本日は、議事補足資料として次第のほかに第1回、第2回定例会での主なご意見をテーマ別にまとめた資料を1枚お配りしております。お手元の資料に不備等ございましたらお知らせください。

事務局からのご説明は以上となります。これより次第に沿って進行いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○議長 それでは、議事に入りたいと思います。

まず、前回までご欠席されていた学校長から、これまでの議論を踏まえてのご意見を伺いたいと思います。

まず、本日ご欠席の余丁町小学校校長から事務局がヒアリングを行ってくれましたので、そのご報告をまずお願いいたします。

○事務局 <ヒアリング報告>

○議長 続いて、今度はA委員にご意見をいただければと思います。

まず、家庭教育に学校長として期待すること、保護者に期待することというのはどのようなことですか。

○A委員 基本的には、どの保護者・ご家庭の方も一生懸命に子どもたちを大事にし、支え、子育てに取り組まれていると感じています。

子どもを大事にするということは、学校も家庭も一緒だと思いますが、もし校長として保護者の方をお願いするのであれば、「大事にする」というときに、今を大事にすると同時に、子どもたちの10年先、20年先を見据え、その子にいま必要な支援というものを、一緒に考えていければと思っています。

○議長 ありがとうございます。

家庭の状況や保護者の意識などについては、どのように認識されていますか。

○A委員 家庭というよりも、社会全体が非常に個別化し、多様な価値観が生じている個の時代になってきていると思いますし、SNSなども含めて個人の考えを表明しやすい時代になってきている感じがします。

個の考えですから、いろいろな考え方が当然あるかと思います。その中で、いろいろなことに対し、賛同もあれば反対もあります。個から出された要望や課題に対して、教育機関の1つとして、価値観が多様化している時代やその状況に応じた学校の対応が求められている、そのような時代だと思っています。

○議長 ありがとうございます。

A委員が教員になられてから今までの保護者や家庭の変化、変容について、どのようにご認識されているでしょうか。

○A委員 私が教員になったのはもう40年程前です。その時代、多くの学校が荒れていて、大変な状況でした。そういう状況を当然、社会も学校もよしとしない中で、目の前の子どもにどう対応していこうかと、保護者・学校が力を合わせないといけない時代でした。

今、そのような時代を経て、その頃に比べると、学校は全体として落ち着いているという感じがします。ただ、今、社会全体が変容し、SNS等の普及に伴い、子どもたちにかかわる課題も、個別化や見えにくい状況になってきており、このような状況を受け止めながら、子どもたちの教育に携わっていくこちらの対応が求められる、そんな時代であると思っています。

○議長 続いて、PTAに対してはどのようなお考えをお持ちでしょうか。

○A委員 時代や社会の変化とともに、PTAに関する考え方・捉え方などが変わってきています。全国的には、PTA組織がない学校もでてきているという話も耳にしています。

PTA活動については、小学校と中学校という校種によっても違いがあると思います。例えば、運動会では、中学校では全部子どもたちが主体で進行しますので、現在、PTAの保護者の方をお願いしているのは、保護者の受付や学校周囲の巡回などです。このように、教育活動を進めるにあたり、PTAの方に一助をいただいています。

それに加え、例えば、今年、熱中症対策として運動会の運営（やり方）を変えたのですが、このことについて全保護者に提案する前に、PTAの役員会で、事前に「今年このような運動会のやり方を考えています、どうでしょうか」と投げかけ、大まかな保護者としての意向を聞くことができました。学校として「この目標・方向で進めていきたい」というときに、こちらの方向性を表出し、ご意見をいただけるという視点でも、大事でありたい存在だと思っています。

学校としても、PTA活動は、お忙しい中で協力していただいているという認識の上で、PTAに過剰な負担がないように、PTAと相談しながら、できるだけスリム化を図りつつ、これからどういう方向でPTAと協働していくのか、考えながら展開しています。もし、極論としてPTAをなくすかなくさないかという話が出てきた場合は、地域との関係や、区全体との関連を含め、学校単位だけではなく、大きな視点で判断すべきかと思っています。

○議長 地域協働学校運営協議会の委員には、PTAの方はいますか。

○A委員 PTAの方も必ず1人入っていただいています。

○議長 PTAでないと入れないのですか。

○A委員 規則上はその学校に在籍する生徒の保護者になりますが、PTAの方に依頼して、地域協働学校運営協議会にどなたか1名を出してもらえるようお願いしている形です。

○議長 ありがとうございます。

ほかに、皆さんから質問はございますか。

○B委員 質問ではないのですが、A委員のお話で、社会全体が個の時代ということがありました。近年、保護者の様子が変わってきた背景には、情報化社会が影響しています。ICT教育が学校も家庭も対応が遅れたことにも、1つ大きな要因があります。保護者の考え方や生活スタイルが大きく変わり、エコーチェンバーのような状況が生まれ、自分の意見を正当化したり、自分の個人的な意見だけでもあたかもみんなもそう思っているような感じを抱いてしまう傾向が、保護者にも、さらに保護者を通じて子どもたちにも広がってきています。また、保護者も子どももAIの利用が非常に多くなってきて、先日、横浜の小学校5年生にAIを使っているかどうかを聞いたら、8割ほどが使っているとのことでした。子どもが使っていれば、もちろん親も使っているはずです。

最近耳にする事例として、親が「AIはこう言っている」と正しい意見としてほかの保護者や先生に主張しようとするケースがあります。これはSNSのエコーチェンバーではなく、AIとの対話の中で自分の考えが強化されるAIエコーチェンバーに陥っている状態があります。これを見ていると、情報リテラシー教育は各家庭の判断に委ねたままにするのではなく、GIGAスクール構想の中で学校も対応すべきだったと思います。授業にはうまく取り組めていても、情報リテラシーやデジタルシティズンシップのような社会教育的な部分が手薄になっていたことを思うと、今後は学校と家庭と一緒に、社会全体として取り組むことを考えていかないと、この問題はさらに複雑になります。分断がもっと進み、自分の意見を通したい保護者がいっそう増えてきて、学校は非常に苦しい立場になっていくでしょうし、保護者が強く確信をもち主張してくることも増えると思います。そこを欠いたままこの先の社会を保つことは無理なので、家庭と学校それぞれではなく、社会全体でデジタル教育、情報リテラシーの力を高めていくことが喫緊の課題であり、AIなどもこのまま手を打たないと取り返しがつかない事態になりかねないと、お話をお聞きしながら、その思いがさらに強くなりました。

○議長 ありがとうございます。

今回の第3回定例会までは区教育委員会の策定する教育ビジョンについての意見が議事のテーマですが、第2回定例会ではPTAの話が中心になりましたので、今日は、家庭教育の向上支援という切り口を中心に、ご意見を承れればと思っております。

9月に開かれる小委員会で、この意見集約という形で意見書をまとめ、区教育委員会に提出します。ただ、教育ビジョンの策定主体は区の教育委員会になるので、あくまでもこの社会教育委員の会議に求められたことはこういう意見でしたという報告をさせていただきます。策定するのは区の教育委員会であるということをご承知おきいただいて、こちらの意見がなかなか取り入れられない場合は、第25期社会教育委員の会議としての最後の提言に盛り込んで、改めて区にお伝えしていくという形を取れたらと思っております。

それではご意見のある方、お願いいたします。

○B委員 第2回定例会で、地域の交流場所についてのお話がありました。まさにICT教育、リテラシーや市民教育といったものは、みんなで情報共有し、意見を交換し、話し合いながら進めることが必要になってきます。一方的に勉強するよりも、みんなで意見を出し合って学んでいく、考えていくということが主となってきます。例えば、落合三世代交流サロンではお父さんが参加することが増えたというお話があったように、保護者の関心度が高くなると、様々な知識が

ある人や専門性を持った人が集まってきます。学校や家庭だけではなくこういう場所で情報リテラシーをみんなで学んでいくというのも、1つの方法だと思います。

例えば、エコーチェンバーの状態やアテンションエコノミーの状態に陥っている人は、多くの場合その自覚がありません。そのようなネットの構造を共有すると、実は私たち自身が無意識に陥っているのではないかという気づきもあるかもしれません。サロン、図書館、地域の公民館といった場をたくさん設けて、声を上げた人たちがそういう場所を活用しながらみんなで一緒に考えたり共有していき、自然に子育てにも参加していくというスタイルができるのが理想的です。青少年の指導員のようにそれぞれの立場で子どもとかかわる方もいらっしゃるので、家庭だけ、学校だけでは難しいときにそういう場を活用していくということも1つ方法かと思いました。

○議長 ありがとうございます。

○事務局 アテンションエコノミーやエコーチェンバーについてご説明いただけますでしょうか。

○B委員 アテンションエコノミーは、関心経済といいます。私たちが隙間時間に何となくスマホを眺めているとき、自分に合った情報が流れてきたり、SNSなどで感情を揺さぶられ、つい見たくなるような情報が流れてきます。無料で使っているのに意識としては低いのですが、縦スクロール（無限スクロール）の設計やその人が反応しやすくなるシステムがスマホに組み込まれており、関心経済といわれるゆえんです。実はその中に膨大な収益構造があります。少し前はデジタルデトックスという「デジタルから離れリフレッシュする」という流れがありましたが、最近の若い世代の中にはアテンションデトックスという「SNSなど情報過多に陥りがちなその仕組みから少し離れ、例えば、少しの間スマホから離れて旅行に行こう」というような意識の行動もあります。

一方、エコーチェンバーは、例えばこの室内でみんなが同じ意見で固まり、そこだけで同じ意見で討論し合ったり考えを共有していくうちに、ほかの意見が入りづらくなり、ここの意見だけが正しいと思い込んでしまったり、他者の意見を全く聞き入れられなくなっていくといったような、いわば箱の中でずっと反響し合っているような状況のことをいいます。

フィルターバブルは、自分の意識でネットを見ていると思っていても、実は自分の検索履歴などから個人にカスタマイズされた情報が届くようになり、そのフィルターの中にどんどん閉じ込められて、自分で考えずに寄せられてくる情報のままに判断したり、行動したりしてしまうことをいいます。買い物だけでなく政治的な意見まで影響し、偏りがちです。

X（旧Twitter）で見られるような意見の偏りや意見が両極端になっていくのは、その傾向がやはり強くみられます。中学生とお話をしていて感じることで、例えば選挙のとき、子どもたちもある政党やある人物を話題にし、好意を寄せていたことがありました。なぜかという、見ている情報がみんな同じで共有しているという状況があり、エコーチェンバーは意外なところに反映されているのだと感じました。そして、ほかの人の話にはもう耳を傾けない状況が起きているので、かなり深刻だと思いました。

また、ドパガキという言葉もあります。ドパガキ（ドーパミン中毒のガキ）はネットから発生した言葉です。刺激的な情報に常にさらされることに慣れ、求めて、結果落ち着きがなく、集中や熟考ができない子どもたちを意味します。

決して発達の問題ではなく、情報の取り方でドパガキ状態になってしまう子もいる、生徒たちもそんなスラングを使っています。一方、アメリカでは、大人もポップコーン・ブレインといって、やはり情報に常に刺激され続け、集中力が続かないという状況が指摘されています。

そうなってくると、日本の大人、子どもの保護者にも同じような状態の人たちがいると思われます。保護者の変化もあり、学校に、昔でいうところのモンスターペアレンツのような方が現れています。子どもがつまずくような出来事があったときに、そこで熟考させて前に進む手助けをするのではなく、「やりたくないことはやらなくて良いよ」と、子どものしたいようにさせるケースがあります。極端な例ですが、「食べたくない給食の日は休んで良い」というようなこともあります。

ここにきて、AIの登場がもう一つ大きな変化を及ぼしていることを考えると、二十数年前にICT教育に対し私たちの認識が遅れたことと同じことをAIについても繰り返してしまうと、今度こそ取り返しがつかないかもしれません。そのため、社会教育委員としては、この新たな脅威に備えて、情報共有や情報発信をしていきたいと思います。これからの教育ビジョンの策定にあたっては、そういったことも記載して、なぜこの現象が起きているかということを知り、説明していかないとならないと思います。

その原因にも迫りながら、かといって決して絶望的にならず、今だからできることはたくさんあると思いますので、新宿区として10年、20年先のことを見据えて取り組んでいくことがとても大事だと思います。

AIに関しては、皆さまも一回使うとやめられないということを経験されているのではないのでしょうか。生徒や保護者にも、一日中AIとしゃべっている方や、子育ての悩みを全部AIに相談するという方がいらっしゃいます。

実はAIは恐ろしい量の電力を消費し、環境への負荷が非常に大きくなっています。

それを軽減するような動きもありますが、消費の増加にはとても追いついていません。この環境の変化は、本当に数十年で人が暮らしぶらなくなってしまうほどです。やっと最近テレビでも取り上げられ始めたかとは思いますが、やはり無駄に使うのではなく、本当に必要なところに使わないといけません。今のように誰でもが自由に使っている状態だと、地球に対する負荷はもっと急速に進み、それが気候変動につながり、もう限界のところにきています。子どもたちや保護者たちと一緒に、10年後、20年後の地球がどういう状況かという意識を持っていかないとはいけません。企業は収益を上げるため、競争のためにそういったことには動きづらいことを考えると、私たち自身が意識を高くしていかなければなりません。海外では問題になってきていますが、日本はまだまだなので、孫の世代のことを考えると、そういったこともテーマとして取り上げたり考えたりする機会を作っていないと非常に危ういと思います。こういったことについて気づいたら調べる、深く考えるという勉強会の場合は、学校や家庭では難しいので、公共施設などにあるといいなと思いました。

○議長 ありがとうございます。

○委員 今、B委員のお話が心に響きました。まさにそうだと思いますし、自分もその中に組み込まれている1人だというのも再認識しました。子どもたちの意識は、大人がある程度発信していることを受けて学習している感じがするので、子どもだけでその中にどっぷり入っていくわけではないと思います。デジタルツールをまず与えられて使える環境になると、どうしても興味のあるものばかりにいつってしまうのは、仕方がないことです。どうしても、与えた後からブレーキをかけていくというやり方になってしまっているのです。本当は一度全部リセットしたいと、まさに思います。

私の学習塾であったこととお話しします。私は、保護者からの欠席連絡や急な連絡に備えて、

授業途中でも携帯を見ることがあります。ある日、夕方に授業をしていたとき、雨上がりに虹が出たことを、近所の人が私にLINEで教えてくれました。今なら間に合うかと思い、一旦授業を止めて、「今、虹が出ているから、みんなで外へ行こう」と言って教室の外へみんな出て、空を眺めました。子どもたちも、虹を見たのは何年振りかというような子もいたし、もしかしたら初めて見た子もいたかもしれません。先生たちも含めて、ああ、都会でもこんなふうに虹が見えるんだと、しばし感動しました。

ほんの数分見て、また授業を再開しましたが、やはりそういう瞬間があったときに、一瞬だけ、みんなできれいなものを見たという気持ちを共有できた感動というのは、子どもたちの心に残ると思います。それがきつと種になって、それから、情操教育という大げさですが、子どもたちは「今日、虹を見たんだよ」ときつと親に言うだろうと想像しました。授業が終わった後に、教えてくださった近所の方に、教えてくださったおかげで、子どもたちと一緒に虹を見られたんですよとお返事をしたら、近所の方がとても喜んでくださいました。そういうことを先生が率先してやってくださることは本当に素晴らしいですと、こんなに褒められて良いのかと思うほど、感動していただきました。

近所の人の声が子どもたちに伝わり、うれしさを共有し、またそれをフィードバックするという、この循環がたった1日の中でできたのは、私はとても大きなことだと思いました。だから、子どもたちは、デジタルではない実体験のような環境に置けば、それなりにちゃんとアンテナも持っているし、感受性も持っているし、おいしいと思ったり、きれいだと思ったり、いい匂いだと思うようなセンサーは絶対あると思います。いかにそういう場所を、私たちが気づいてつくってあげられるかということです。あまりそれを保護者に言い過ぎると、「意識高い系」のような言葉でくくられてしまったりもするので、そうではなくて、本当に日常に落ちている、小さなことにもう少しスポットを当てましょうという考え方が、何か運動として起こるといいなと思います。気づいている人はたくさんいると思いますが、なかなかそれが横に広がっていかない感じがします。テストで高得点を取るとか、受験に役立つとか、そういうことばかりにフォーカスされている気がします。

○議長 思いをそれぞれ語っていただきました。

○D委員 家庭の教育力の向上支援ということは、とても難しいと思います。果たして学校で家庭の教育力の向上について話しているのだろうかと思います。地域協働学校でも、私はもう10年以上委員を務めていますが、家庭の教育力向上というテーマで取り組んだことはありません。ですから、家庭の教育がどのようになっているかということは分からないのですが、一端としてお話しします。

私が委員を務める中学校の地域協働学校では、3年生の高校受験の面接試験練習を行っています。私も試験官役をもう5、6年しています。15分ずつの持ち時間ですから、聞く内容はある程度限度がありますが、基本的な項目に沿って、志望校や思い出、今後何をしたいかといった話をします。私がいつも最後に聞くことが、「あなたは新聞を読んでいますか」という質問なのですが、生徒は100%新聞読んでいないです。

何で情報を得ているかというと、ほとんどがスマホで、テレビでもないとのことです。ほとんどの子どもたちがスマホで情報を得ているということです。ですから、去年の12月頃に面接練習をした際に、「あなたが最近、どのような事案について今一番大事だと思うか」と尋ねると、女性初の総理大臣といったほとんど同じ答えが返ってきました。世の中にいろいろなこ

とがあるけれども、新聞という活字ではなくスマホから情報を見ています。スマホはいろいろな面があり、良いことも悪いことも、いろいろなことが書いてあります。表もあれば裏もあるし、嘘もあれば本物もあります。大人でも非常に難しいですが、中学生の段階で見分けることができるかどうか、難しいところがあると思います。

そんな経験をして、家庭で親子でそういった話をしているか、また、政治的な話について聞くと、ほとんど政治にはあまり関心がないようです。学校では政治教育はしてはいけないといったニュアンスもあるようですが、偏ってはいけないけれども、家庭では今の政治はこうだといった話をきちんとしたり、社会のことについて親子で話し合うということが必要だと思います。今はどの程度されているのでしょうか、私には孫はいますが、該当の年齢の子どもはおりませんし、実際に昔と今で子どもは全く違うので、現場で家庭の教育力の向上についてどのような話し合いがされているのかというのが、難しい課題です。難しい課題ですが、必要なのではないかと思います。スマホに頼っていたらどんな子どもになってしまうかと、本当に心配しています。

○議長 ありがとうございます。オーストラリアでしたか、SNSを規制するという動きも、幾つかの国で出てきました。

他の委員のご意見はいかがでしょうか。

○副議長 正しい内容を見極めることが難しいところもありますが、AIやITのように情報がたくさん得られる時代だからこそ、先ほどのA委員のお話に、個の問題がありました。そういった状況ですので、やはり家庭では自己肯定感や非認知能力を高める、育てるということを大切にしてほしいと思います。

G委員が携われてきた家庭教育ワークシートのコンセプトでもある根っこを育てること、心根を育てるということは、私は家庭教育で一番大切だと思います。例えば、5メートル、6メートルの太い木があれば、根っこはその3倍も4倍も根を張らないと太い木は倒れてしまいます。子どもたちの育て方も、幹や枝葉を支える太い根っこを育てるということが本当に大切だと思います。そういったときに、やはり幼児教育、さらに生まれる前からの親の心構えというものが必要になってくると思います。

教育委員会の範囲としては大変難しいとは思いますが、やはり子どもに関するところは総合的に連携をとって、子どもたちに関する部署は包括的に強い連携を持って見ていていただくことが必要かと思っています。

次代を担う子どもたちが、心豊かに育まれることは大切なことです。複雑な社会の中で子育ては家庭への負担も多いことと思いますが、子どもの育ちの中で保護者として向き合う期間は短いものです。子どもに寄り添い、育ちへの願いを日常の生活の中で、人間性を豊かにし、生きる力を育むための土台づくりを願いたいものです。家庭だけに求めるのではなく、地域や社会全体が役割を担っていくことも重要だと思います。

まず家庭教育というものは、知識の前に自己肯定感や非認知能力を高めてほしいということが、私が今一番感じているところです。

そのためには、これから保護者がどのようにしていくかということが問題になりますが、新宿区の教育目標はそういったものに照らして良いものになっていると思います。そして、教育ビジョンの3つの柱に「子どもの育ち・学び・自立を地域とともに支えるまちの実現」という柱を加えた新宿区教育大綱もあります。教育ビジョンの柱3つに10の施策は、よくできてい

ると思います。

○議長 ありがとうございます。

○B委員 家庭教育に関連してお話しします。私は今、自宅から自転車で5分程のところに住んでいる孫と朝活をしています。というのも孫たちは早起きが習慣になっているのですが、朝の時間帯、30分動画を見たり、ゲームをしていると言うので、その行動を定着させないために、朝一緒に散歩をして、それこそ非認知能力を高めようというたくらみもあり、運動したり、花を見たり、近所の人と挨拶したり、犬に話しかけたりすることを6時15分から30分間行っています。7時には解散して、それぞれ仕事や学校へ行きます。もちろんどの親もできることではありませんが。

ただ最近、小学生でも、ゲームをしたり動画を見るために早起きする子が増えてきています。保護者も、早起きしているのであれば良いと感じられている方がいらっしゃいます。

○議長 夜更かししているわけではないし、ということですね。

○B委員 そうなんです、小学校低学年は9時頃に寝るので朝早く目が覚めます。すると起きて動画を見ている子もいるようです。ただそうすると子どもですから切り替えが難しく、腰をすえたままだるくなってしまう。勉強関連のコンテンツを見るなら、その日の予習や、勉強を扱うYouTuberさんなら学校へ行く気力をそぐこともないかもしれませんが、そうではなくて、ただとめどなくゲーム実況動画を見たりゲームしたりして、自分でやめることができないのであればやはりよくありません。私のほかにも、近所に朝活をやっているお父さんも見かけます。親が自分の健康や家族の時間と思い、少し頑張れると良いなと思いますが、やはり忙しい昨今は無理かと思います。私みたいに祖父母が近所にいる家族もあまりないと思われる中で、そこはほかの方の協力があると親は助かると思います。朝は年配のボランティアの方たちがお掃除をしていたりするので、そういう方たちも巻き込んで、昔でいうところのラジオ体操のように、子どもたちと朝の時間を過ごす。この花の名前は何かというのかとか、これは雑草だよといったお話をするなどして、忙しい親が補えない部分を周りが補っていくことができれば良いと思っています。

そうすると、先ほどA委員のお話にもありましたが、大きくなったら何になりたいかとか、好きな芸能人やスポーツ選手は誰かなどという話題や、近いところでは、今日の学校の授業は何かと会話をしながら、本人が見通しを立てる練習になります。何にも考えずに本当に刹那的に過ごし、思考が止まっている子どもが増えるのを防ぐために、見通しを立てるという習慣づけも大事かと思います。ただ、保護者にそれをするように言うと大変だと思うので、周りにサポートできて、信頼できる大人がいてくれることは、特に都会では大事だと思います。

○議長 ありがとうございます。E委員、いかがでしょうか。

○E委員 難しいです。お父さん、お母さんになる人が、出産後に病院で沐浴を覚えるレッスンを受けますが、それと同じぐらいの感覚でデジタル教育を親にしなければいけないのではと思います。そのレベルでのデジタル教育をしていかないと、どうにもならないところまできているのだろーと思っています。

私の会が運営している施設にミニFMという電波の弱いFMを発信できる部屋があります。そこで、私がコロナ禍前に放送教室を開催しました。小学生を対象に週に1回、1か月に3回程のペースで開催をして、声をきれいにしたり、原稿を書くといった取り組みをしましたが、子どもたちの様子を見てみると、ユーチューバーをやりたいという姿が見て取れました。なる

ほど、そういうことかと思い、ネットのリテラシー、ネットで発信するということは、どういうことかということも含めながら開催していました。もっとネットのリテラシーを伝えるような企画ができたなら、他のメンバーとともに進めています。

義理の兄がニュージーランドにいますが、ニュージーランドは図書館に、図書館司書とは別にネット関係やデジタルの機器関係に詳しい人を必ず置いていて、高齢者の方はスマホの使い方相談もできる、そのようなことに特化した人が配置されているという話を聞きました。誰でも集える場所にそのような人がいるというのも、アイデアとしては良いと思っています。その人から派生して、意識を持たない人たちにデジタル教育が伝えられるということ、そして親子の対話で、考える力を養っていけるような、対話力と思考力が養われていく、それはとても大事だと思っています。

自分が育った環境は、分からないことがあったら、その場で親が辞書を引いてくれるという家庭でした。デジタルになっても全然悪いとは思いませんが、分からないことがあったときや、何だろうと思ったときに、「あなたはと思う」といった対話ができる、そのような会話が自然と発生する、それが家庭の教育力のようなものではないかと私は考えました。

○議長 今のお話を聞いて感じられたことなどはありますか。

○F委員 ニュージーランドがうらやましいです。

○E委員 全部に行き渡っているのでしたら、すごいなと思いました。

○議長 前回、図書館の機能をどう考えていくかという話が少しありました。日本の図書館は静かに落ち着いて本を読む、本を借りるところというだけのように思われていますが、他の国を見ると、交流の拠点や居場所になっているようなところもあります。例えば、ぎふメディアコスモスという複合施設の中にある図書館には、親子で過ごせるスペース（親子のグローブ）があり、0歳から2歳までの親子が靴を脱いでのびのびと過ごせるスペースが用意されているなど、日本でも対話や関係性を意識したスペースづくりの発想が日本でも少しずつでてきたように思います。

○E委員 地方のほうが、そのような運営が最近出てきていますね。

○議長 おそらく広い場所があり、人を集めたいという気持ちがあるからでしょう。

○副議長 図書館もそのように変わってきたわけですね。集える場所となってきましたが、新宿区は土地が狭いので、どうしてもおしゃべりしたりすると、いろいろなクレームが入ったりして大変なのでしょう。以前、中央図書館の検討委員会で、もう少し広い場所、集える図書館と、検討したのですが、それはなくなってしまいました。

今後、中央図書館が新たにできるときは、そのような機能を持ったものができていくのだろうと思うところです。先日、図書館運営協議会で出た話ですが、ブックスタート事業として0歳児に本を配っていますが、その本の配付率は97%になっているそうです。保健所の0歳児健診のときに配られていて、そこで読み聞かせをしながら配付をしているということで、ほとんどの保護者の手に入るようになっているそうです。3歳児健診のときにも本の配付があるのですが、時間的に余裕がなく、読み聞かせもできずに本の交換券をお渡ししているそうです。そうすると、交換率は78%とのことでした。中央図書館や保健所で交換できるそうですが、おそらく交換に行く手間や、何冊かの中から選択できる方法もとられていますが、すでに持っているなどの理由があるのではとの報告がありました。

本は心育てに大切なもの、心情を育てるのに大切なものですから、なるべく多くの人が小さ

いときから本に触れるということ、図書館でも心がけてくださいという話はしてきました。

〇〇委員 ブックスタートの0歳児の読み聞かせは10年以上やっていました。今は曜日が合わなくてやっていませんが。

〇副議長 ブックスタートも、社会教育委員で最初に始めたのではないのでしょうか。

〇事務局 ブックスタートは、平成15年度に当時の衛生部で各保健所での0歳児健診の際に絵本を渡して説明のみをする形で始まりました。平成18年度からは当時の生涯学習振興課地域教育係で読み聞かせのボランティアを募るようになり、読み聞かせも始まりました。地域教育係が関わったきっかけは、北海道恵庭市が平成12年度から始めたブックスタートの実践報告を聞いた社会教育委員から、家庭教育支援の一環として取り組むことを提案されたことからです。他の委員の関係者に読み聞かせボランティアのグループの代表がおり、「せっかくなら読み聞かせもできるとよいのではないか」と協力を求め、保健所でも読み聞かせボランティアが活動するようになりました。その後、平成20年度に健康部から中央図書館（子ども図書館）に事業を移管しております。

〇F委員 小さいお子さんがブックスタートの肩掛けかばんを持っているのを見かけると、嬉しくなります。ブックスタートのかばんは、子どもだけでなく、親にとっても図書館へ行く習慣となります。

〇議長 今までの話に関わらず、ご意見をどうぞ。

〇F委員 新宿区の教育ビジョンの第3期について、考える機会をいただいてありがたく思っています。

一つ目は、家庭の教育力向上について。家庭教育はとても曖昧です。今は多様化の時代、新宿区は特に外国籍のご家庭も多く、共通の価値観を持つことが難しい。

例えば、早寝早起きがいいというような、分かりやすい共通の「こうしたら子どもがよくなります」というものが、ないように思います。社会の関心事についても、新聞だと、開いたときに発信者側の扱いが分かります。1面、2面、3面、見出しのサイズなどで、大切なニュースはこれ、トピックスはこれと表現されています。翌日は小さくなって、新しいニュースが分かります。ネットニュースの場合、上から下に流れます。フィルターバイアスもあり、その重要性が分かりません。

女性の社会進出に伴い、友人の家庭を訪問する機会も少なくなります。交流もファミレスなどで集まるようです。そうすると、隣人の常識に触れる機会が減り、独りよがりになりかねません。そこで、家庭教育ワークシートがとても重要になってくるのだらうと思います。

この先の10年に向けて、家庭教育ワークシートに情報リテラシーや外国人の子どもが多い観点などを盛り込み、刷新したらどうかと思います。

また、第1回定例会でも話題に上りましたが、配布するだけでなく一緒に読む機会を、多少の強制力を持ってでも設けていかないといけないのではないかと思います。強い意志をもって取り組まないと、家庭教育がさらに曖昧になってしまうような気がしています。

もう一つ、実体験の重要性を謳って欲しいです。10年先を想像すると、現実（リアル）を伴って体験させる機会が必要だと考えます。例えば、漢字の練習はタブレットの書き順動画が主流になりつつあります。もちろん書くことを優先されている先生もいらっしゃいますが、タブレットは、採点不要で教員の働き方改革の点でも優勢です。

具体的には、文字を書くこと、正月の習字、楽器を奏でる、理科実験等の校内授業や、遠足、

修学旅行、体験学習等の校外授業です。新宿区は女神湖などで共同生活を通じて連帯感や友情を育む機会があります。宿泊体験は多様化の中、食事や共同浴場での入浴マナーを学ぶ貴重な機会と捉えて欲しいです。

子どもの数は減っています。単純に移動は楽になり実体験の機会は増やすことができると思うのですが、危ないとの理由から遠足などもなくなってきています。VRなどの代替で時代としてはなくなる方向ではあるのだろうけれども、一方で情報リテラシーを、一方では実体験を拡充するビジョンであってほしいと思います。

○議長 何か今のご提案に対してご意見などございますか。

G委員、家庭教育の向上に関して、それぞれの意見を聞きながら思われたことについて、ご発言いただけますか。

○G委員 気づいた点について、最近考えていることを含めてお話しできればと思います。

3つあり、1つは、学んでいくこと、親が学ぶ機会が必要だと思っています。SNSだけの情報ではなく、いわゆる発達心理学などの「発達」という知識、すなわち子どもを育てたり、接する上で必要なことを学ぶ機会がほぼありません。子どもと関わるために最低限知っておく知識を学ぶ機会の保障が欲しいと思っています。それには、家庭教育ワークシートは活用の余地があると思っています。

子どもの発達といった場合に、どの時期から対象にするかという議論とも関係しますが、やはり生まれた後からの関わりが大切です。子どもにしっかり共感していきながら、そして子どもが徐々に自分で考える力を養っていける、いわゆる発達課題を乗り越えるため、子どもの成長に向き合っていくことが大切になります。保育の中では当たり前になされていることを、保護者とも一緒に考えていける機会があれば良いのではないかと考えています。それは、保育だけではなく、保幼小連携、保幼小中高というような長期的な視点からも、子どもとの距離感であったり、距離感プラス思春期のときにどう関わってあげられるかということは、しっかり保護者も含めて共有していく機会が欲しいと思っています。

2点目は、体験に関してですが、遊びの体験、五感を使う体験ということを伝えていく必要があります。保護者自身もその大切さを実感できていないかもしれません。私たちが生きていく、人間が生きていく中、幼少期、学齢期で五感を使うということの意味を一緒に考え、子どもたちに体験する機会というものを保障できないかと考えます。

それと同時に、もう一つは、他人のために役に立つという機会を、地域の中で意図的につくっていくことはできないかと考えています。「自分が」という意識も大切ですが、他人のために何ができるか、他人のために自分が役に立っているという自己有用感という点も子どもたちにとっては求められるのではないかと考えています。

最後につながりについてです。保護者の方自身も、安心して他人を信じていいというような体験を実感できるような企画を検討していきたいと思っています。

大学で私が担当している授業では、学校でのいじめや不登校、そして子育ての内容であれば虐待などに触れざるを得ないのですが、そのような事に触れると、体調不良になる学生がこの数年で急激に増えています。いろいろな傷つき体験のある子どもが増えている気がしています。その子たちが保護者になっていくわけですので、やはり他人への信頼という面では、リカバリーをする機会がないままきているのではないのでしょうか。

また、つい最近、学生は、学校に対して信頼をしているのか、先生に対してどれぐらい信頼

をしているのかを確認するために、簡単なアンケートをしました。どの時代の学校や先生と限定せずに、一般的に「学校とは」、「先生とは」と聞いてみました。そうしたところ、60%まではいきませんが50%以上で「学校は信頼していない」、「先生も信頼していない」という結果となりました。大きなことだと思います。

今の20歳前後の子たちが、それほど先生や学校に対する信頼感がない中で保護者となったときに、ちょっとした先生の言動に対して、過敏に反応するということは多々あり得ると思います。「人を信頼していいんだよ」ということを実感できるような関係性づくりの場を用意することも必要なのではないかと考えたりもします。そのためには、ただ場所を用意するだけではなく、ファシリテーター的な役割を持つ、つないでいてあげるような人がいないと、難しいのだろうと思っています。

もう一つ、友達に対する信頼感についても確認してみました。友達に関しては8割ぐらいが信頼しているとの結果でした。ママ友、パパ友も欲しいと思っている一方で、傷ついた体験も大きいので、友達を求めているけれども、何かのときに裏切られるのではないかと、極端に思い込んでしまうような振りが特徴としてあります。

また、私自身自分と同世代を対象に授業をすることがあります。その中で、昭和の世代で厳しく育てられてきた人が授業のグループワークの中やロールプレイをする中でお話しになったこととして、「厳しく育てられていると、人を褒めるということにすごく抵抗がある、褒めたくなくなる」と仰っていました。ある意味、子どもたちから助けを求めるということもすごく大きなことですが、助けを求めている姿を見ると、甘えていると思ってしまうという発言をされる人が一定数いらっしゃいます。厳しいことを経験するというのは大事ですが、厳しさと寛容性というところを柔軟に考える機会、地域の大人として一緒に考えられる機会があれば良いのではと思っています。

○議長 G委員の発言に関して、何かお感じになられたこと、ご意見等ございますか。

○F委員 これまでの議事の中で、タイムパフォーマンスやコストパフォーマンスが重要視される時代、「助け合い」や「他の子のために」といったことにハードルを感じる人が多いかもしれないというお話がありましたが、この「助け合い」や「他の子のために」親が何かをすることによってハードルを感じられてしまったら、教育とはどのようにしたら良いのかを考えてしまいます。集まって何かをすることの意味をどこに見つけるのだろうと思っていたので、今、G委員の仰った、他人のために何かをする、人を信用することとは本当に基本的なことで、改めて伝えなければいけない大事なことだと思いました。

○議長 A委員、ここまでのお話を聞いてお感じになられたことを、ご発言いただけますか。

○A委員 家庭教育について、学校という立場での発言となりますが、今、学校の中で、「すぐー」という、直接、保護者に伝える連絡手段があります。特に、小学校から進学してきた中学校1年生の保護者からは、そのすぐーをもっと活用してくださいというお話があります。小学生ですと、自分でプリントをもらって保護者に渡すということが、特に低学年では難しい部分もあり、直接、子どもを介さずにすぐーで配信して、連絡漏れがなくなるように活用しているところがありますので、同じようにとの思いをお持ちになっています。

しかし、個人としての感覚ですが、中学生がプリントをもらったならば、自分で管理して、きちんと保護者に渡したり、自分で一回読んで、それを理解する力を身につけることが必要かと思っていて、あまりすぐーを便利に使い過ぎるのは、「自分の力でできない子どもを育て

ているのでは」と思うときがあります。

世の中が子どもを大切にするのは大事なことです。一人一人の個の存在を認め、大切にしているのですが、あまりにも大人が先回りし過ぎると、結局は子どもの力を削いでいるのではないかと思います。子どもはたくさんの可能性を持っていて、様々なことにアンテナを張って、手を伸ばそうとしているけれども、大人の先回りで、子どもの力を発揮させ、伸ばさせる機会を損なっているのでは…と感ずることがあります。

今年、保護者の方には、他人と比較しないで、お子さんの現状を把握し、今の自分よりも一歩でも二歩でも自分の意思で前進しようとしているならば、それを支えて褒めてあげてほしいとお願いをしました。例えば、テストで、平均点の70点を評価のラインにするのではなく、その生徒自身の頑張り、30点だった生徒が次に50点を取ったらすごい、平均点より上で80点を取っている子でも、次が60点だったら下がってしまった原因を一緒に考えるなど、あくまでも他者との比較ではなくて、自分のお子さんと向き合いながら、その成長や課題を捉えてほしいという話をしています。

同時に、教員には、「子どもの主体性を育てる」という目標を示し、「自分で今の自分を越える、その一歩を自分で踏み出せる、そういう生徒を育てていこう」と伝えています。そのために、基本的には3つのお願いをしていて、まず、授業でも教室でも部活動でも、「自己判断する機会」をつくってほしい、自分で自分の方向性を定める機会をつくってほしいと。次に、自己判断させたならば、そこに結果が出てきますので、その「結果の振り返り」をきちんとやらせ、成果と課題を明らかにしてほしい。最後に、その成果と課題に対して、大人として、よりよくなるためにはこうしたら良いのではないかと、こういう視点もあるのではと、「子どもが自ら階段を上がるためのヒント」を与えてほしい。この3つのステップは、達成感や自己有用感につながり、主体的行動の基盤となるから、それを積み重ねていこうと話しています。

本題の家庭教育に戻ると、一気に何かを変えろというのは難しい時代だと、正直思います。学校でできること、社会でできることを一つ一つ積み重ねながら、子どもたち、そして保護者と一緒に歩む取り組みを一つ一つ増やして積み重ねていく、何ができると考え取り組んでいくしかないのかなと思っています。体験が大事なのだというお話を聞きながら、そのとおりでなと思いました。

宿泊行事ですが、新宿区では中学校に入ると1年生で女神湖移動教室に行きます。2年生はスキー教室に行き、3年生では2泊3日で修学旅行と、毎年宿泊行事があります。すると、1年時の宿泊行事の反省点を、次の2年時の宿泊行事の課題としてフィードバックさせることができ、それを生徒自身で解決できるように頑張ろうと指導につなげられ、子どもの成長へとつなげていけるようになります。

学校は、集団生活であり、社会の縮図のようなものです。その中で、子どもたちが一つ一つ体験することを、どのように成長に結びつけていくか、どう次のステップを踏ませるか、それが学校の役目なのかなと思います。

○議長 貴重なお話、ありがとうございました。

それでは、皆さんのお話をお聞きして思ったことをお伝えさせていただきます。

教育社会学のテキストなどを見ると、家族の機能と学校の機能がどのように違うか、家族、家庭の機能が一次的社会化を促す、学校は二次的社会化を担う場所だというように書いてあります。そのとおりだろうと思っています。学校は他人と折り合いをつけたり、集団生活をする

場所でもあるので、今、A委員がおっしゃっていたような、人を思いやるといったことを培う場所となります。実は今、一次的社会化の役割を担う人がある意味なくなってきたがゆえに、学校にそこを求めてくる状況が、学校にとっては一番きつところなのかなと思ってお聞きしていました。そうすると、一次的社会化と言われている、他人への信頼や実体験、そのようなものを積ませる機能は、どこが担っていくのかと考えさせられてしまいます。

それとともに、家庭教育力の向上、この言葉は変えたほうが良いのではないかと事務局には言ってきているのですが、特に向上という言い方がよくないと思っています。一次的社会化の機能をどこが担うのかが見えなくなっている今、子どもの育ちの難しいところになってきていて、家庭教育というと、家庭がしっかりしているという前提での議論になってしまいます。でも、今は、ひとり親の中でいろいろ生活を維持しながら頑張って、父親の役割も母親の役割も1人で果たさなければいけないような状況の中で、生活の糧を築くために夜昼なく働いている人たちもいたり、外国ルーツの家庭で、保護者の都合で文化習慣、生活習慣も違う日本に来て、学校に行くという子どもたちもいるという中で、一次的社会化の機能がどうあるべきかということをもっと細分化してみるとか、役割みたいなものを考えていくことが大事なのかなと思っています。

そうすると、委員の中からもご発言がありましたが、家庭教育とは一体何なのかということ、今の時代に即して考え直していかなければいけないのかなと思っています。その言葉自体も使うのはどうかなと思っていますので、10年先を見据えるなら、ここの表現というのか、行政の施策は急に転換はできない部分があるし、その中で何ができるかという話になるけれども、家庭教育という言葉を使うことと、向上というのが特によくないと私は思っています。私的な領域の部分に関して、向上に「支援」という言葉がつくことによって、向上が前面に出ていないように見えるところはあるのかもしれませんが、一次的社会化の機能のようなものを分節化させて、副議長の言う自己肯定感や非認知能力、他者への信頼、実体験の積み重ねなど、ベースがきっちりと培われた上で、学校教育にバトンタッチするという状態を、本来はつくっていかねばならないと考えます。

学校の働き方改革も求められている中で、あれもこれもと求めるのは、本当に学校や教員の負担を大きくするだけのことになりますし、先生たちは、保護者対応で一番つらい思いをされていることが多いかなと、東京都教育委員会にいた際には感じました。言葉の使い方も含めて、今日いただいた意見を踏まえて、9月の小委員会で議論をさせてもらえればと思います。

話は変わりますが、今、「ボランティア活動」との言葉自体も学生にとっては、あまり良い言葉ではないそうです。無理やりやらされている、やらなければいけないものだ。学生に発表させた際、「ボランティア活動はシャバい」と言うので、「シャバいって何だ」と聞いたところ、ただ格好悪いとか、意識が高すぎてついていけないとか、揶揄する言葉として使っているという話でした。

リアクションペーパーを見ると、半分以上の学生が共感していました。また、学生言葉で、「ガクチカ」という言葉があって、エントリーシートなどを書くときに、学生時代に一番力を入れたことを略してガクチカと言うらしいです。

若者言葉というのは、上の世代と区別して自分たち独自の領域をつくるという意味においては、そこから生まれてくるのでしょうけれども、時代の流れが早い分、どんな状況に子どもたちがいるのかということ、大人の経験から、子どもたちの立場、視点に立ったときに、この

社会がどう見えているのかということを理解していくことが必要ではないでしょうか。エコーチェンバーの話にしても、確かにスマホを見ていると、ユーザーの関心をAIに読み取られてしまって、出てくるニュースが人それぞれ違って、興味、関心に基づくマーケティングをされてしまっているのが現状です。

自分の関心があること以外の社会がどう動いているのかが分からないような中で、親の関心と子どもの関心が、全然違う中で子育てするということは難しいのかもしれないし、子どもの目線に立って、どのように感じているのかということを理解しないと、実は次の一步が進まないところがあるのかもしれないと考えます。

最近、読んでいる本で、「子は親を救うために「心の病」になる」という本があります。教育家族というか、親も学歴が高くてしっかりした家庭の子どもが、何で摂食障害になるのか、メンタルの病を抱えている子などについて書かれています。今、学生への合理的配慮の話もとても多くなっています。その本で一番印象的だったのは、お母さんが引きこもった子どもに何とか少しでも心を開いてもらいたいと思って、「子どもの頃好きだったハンバーグよ」と声をかけた時点で、お母さんを子どもが殴ったという内容がありました。

お母さんにとってはいつまでも子どもで、あなたはこういういい子だったのよ、そこに戻ってというメッセージに対して、実は子どもはそこを乗り越えたいと苦勞している。昔は社会に反抗するという行動として表現されていたけれども、今はどちらかというと、全部自分の中にため込んで表情を見せなくなる、その結果として引きこもってしまう。そのような構造もあるのだということを踏まえておかないといけない、この間思っていました。

今日、キーワードとして、いろいろと貴重なご発言をいただけたと思います。

○事務局 家庭の教育力の向上について、より保護者に届けやすい言葉を、皆さんにお聞きいただきたくお願いします。

○議長 家庭教育という言葉は、今の時代においては使わないほうが良いのではないかと感じたりします。残したほうが良いという意見もあるでしょうし、向上という言葉はやめたほうが良いかと思いますが、皆さんいかがですか。

○委員 家庭教育力、私もう〜んと思いましたけれども、子どもたちも家族の一員なわけです。家族を構成している一員ならば、やはり役割は必要だと思うし、昔はよく家の手伝いをしようと言われていましたが、それもやり過ぎる親がいるから、ヤングケアラーといった言葉が生まれてきているような気がします。その子その子の発達に応じて、家族の一員としてできることはあると思います。ごみを捨てる、自分のものを整理整頓する、このプリントは来学期も使うからとっておこう、これはもう終わったから捨ててもいいといった取捨選択をする能力というのも生きる力になると思うので、教育力というワードよりも生活力のような形で、生きていくために必要な力を家庭で取り組んでいくということが、広い意味で良いのではないかと思います。

家族の中で、子どもがお客様になってしまっているのかなと感じます。お客様のまま大人になるから、大人になったときにできないというようなことが起きているような気がします。

生活の中で、お母さんが忙しければ、この部分をやっておくと、次のお母さんの作業が楽になるといったことは、近くで見ていると分かることだと思うけれども、その時間を全部スマホに取られていれば、親が一体何をして忙しいのかも全然分からないし、お父さんやお母さんがどう思っているのかということに、関心すらなかったりします。自分に向けられることに対する関心はあるけれども、そうではないことについて親がどう考えているかということに対して、

子どもは全く関心を持っていないような気がします。

○議長 そのような家庭もたくさんあると思いながら、ヤングケアラーの家庭の子どもは、逆ですね。

○委員 感じ過ぎてしまいます。

○議長 感じ過ぎてしまって、自分を抑え込むということが起きているような家庭もあるのが、難しいと思います。

○委員 すごく両極端で、こっちのやり方だとまずいと思ったら、何かちょっと問題が発生したりすると、もう面倒くさいからやめようと、ゼロにしてしまいます。

例えば、もう1週間とか1か月とか1つの問題に対して考え続けて、ちょっと頭の中に取り出して、もう一回反芻するみたいなことを、もう子どもたちはできないと思います。すぐ結果が出たり、すぐ答えがあるものをよしとしている感じがするから、ひとつのテーマについて考え続けるということが多分できないのではないのでしょうか。しかし、すごく大事なことで、何かぱっとひらめいて、ああすれば解決するのではないかと考えることはあると思いますので、白黒ははっきりつけるのではなくて、グレーゾーンという領域をつくっておいて、解決できないものを頭の片隅に持っている状態で生活している大人のように、子どものうちから、過重にならない程度で、あってもいいのではないかなと思います。

全て答えを出すのではなくて、対話も大事だと思いますが、親がすぐそれを答えるのではなく、1週間後にもう一回話そうか、それまでちょっと考えておいて、というように宿題を出しても良いのかとは思いますが。

○議長 生活力というキーワードが出ましたが、ほかにはいかがでしょうか。

○副議長 育ち合いといいますか。共に教育とすると、押しつけるような感じになってしまいますので、共に育つ教育など。

○議長 共に育つという言葉を使って、「共育」という表現をしている人たちもいますね。

○副議長 親も子どもから教わることがたくさんあります。

○議長 今は子どもから教わらないと分からないことがたくさんあります。

育ち合いですね。ほかはどうでしょうか。

子育てではなくて、子どもが自立するという、自動詞としての子育て支援という言葉がいいのではないかということは、以前に発言したことがあります。

今は、どちらかというと、共働きの保護者が子どもを預けやすいように、それはそれで必要ですが、子どもの成長、発達、自立といったところを中心に施策が組まれているわけではないですね。子どもの生きづらさや、大人がスマホを子どもに持たせている部分があって、その中で子どもは自由を勝ち取ろうと思っている側面もないわけでもないです。最近小学生の女の子が、ぷちぷちするシールを集めているところを見ていると、まだ子ども心があるのかなと、若干ほっとする自分がいたりします。

○副議長 もう一つ、教育ということではなくて、学校に求めるものや行政に求めるものが多いのではないのでしょうか。自分たちの職場の改善、例えば、働きやすい職場にするとか。朝、自分たちが早く出勤するために、学校が早く子どもたちの居場所をつくらなければならないとか、帰りはもっと遅くまでとか、そういうものではなくて、もう少し子どものことを大切に考えながら、子育ての時期は、職場の人たちに働きかけて、みんなで子育て支援というか、職場の環境を整えることも必要ではないのでしょうか。

例えば、行事があるときは休むのが当たり前のような感じで休暇をもらえたり、朝、今までは8時や8時半に出勤だけれども、子育て中は9時に出勤できるといったことが求められないものか、働きかけられないものかと思います。

○議長 公務員の世界は、率先してやらなければというのはありますが、ほかのところはそうでもないですね。

○事務局 新宿区では、ワーク・ライフ・バランスの視点から、教育長名で、区内の雇用主の方をお願いをしています。通知文がホームページからダウンロードできるようになっています。

○副議長 日本全体で、そのような動きになると良いのですが。1つの区や市や県では、なかなか難しいです。少子化になるから、もっと子どもを大切に育てていこうというような形になるといいですね。

○議長 そうですね。オランダは、ワークシェアリングの話から始まり、同一労働同一賃金となっていますが、日本の同一労働同一賃金と全然違うものです。シングルマザーでも子育てができるお給料があり、パートタイマーとフルタイムの人は、基本的には同じ賃金にして、子育て中は4時には帰れるといったものがあるなどです。豊かさとは何か、社会のコンセンサスもどうつくられるかというようなお話ですね。

この会議後に何か意見がありましたら、事務局へお伝えいただくということをお願いいたします。

○事務局 今後の予定です。第1回小委員会が9月8日の9時半からになります。第4回定例会は12月1日になります。

○議長 冒頭に言いましたように、教育ビジョン自体は、策定する主体が教育委員会になりますので、あくまでも求められたものに対して、意見を集約していきます。そこで取り上げられないものは、今後のまとめとして、どう入れていくかということを考えていくことになります。

次回は12月ということで、本格的にまとめをどのようにつくっていくかというものの議論ができたと思います。

○副議長 皆様、お疲れさまでした。

今日は教育ビジョンについて、いろいろとご意見をいただきました。特に家庭教育ということで、皆さんからいろいろなご意見いただきました。それを小委員会で話し合って、皆さんにご提示できるような形になればと思います。

本当にありがとうございました。

午前11時37分閉会